

「低年齢留学の薦め」 + α

拝復。

ここ数日梅雨らしい天気ですね。今日は事務所に閉じこもりきりですが、一昨日は国立競技場に J1 の試合を見てきました。「レイソル柏」 VS 「浦和レッズ」。主催は「レイソル」なのですが、ご存知レッズの応援団のすごい事。私はバックスタンドのほぼ真ん中で見ていたのですが、まるで北朝鮮の「マスゲーム」の

おかげさまで勝ち点 3 の差で 4 位につけています→



ような一糸乱れぬ応援に圧倒されました。でも、試合は我が「レイソル」の勝利！。スター軍団浦和レッズを破ったこの一戦の意味は大きい。大のレイソルファンの友人と一緒にいくのですが、不思議と私が行くと負けない（笑）。友人からは是非次もと^^;。ハイ、日立台に応援に行きます。

あまりに気持ち良かったので、前置きが長くなりました（笑）。今日のお題は「低年齢留学」。最近、中学・高校生を短期留学させると言うのはある種の流行になっています。ところが、自分のお子さんを 5 歳と 6 歳の年にスイスに留学させたおっかさんがいます。今日はその著書「スイス留学大作戦」を中心に「低年齢留学」をご紹介します。日本もゆとり教育なんて言っている場合じゃない、と言うのが読後感でした。勉強も宿題もスポーツも、日頃のしつけもとても厳しい留学です。

筆者は「若草まや」さん。現役バリバリのお医者様です。「低年齢、スイス、ボーディングスクール留学」をキーワードに 実際には自分のお子さん（当時 5 歳と 6 歳の女の子）をスイスに留学させたこと



で この世界では知られた人だそうです。「完全版スイス留学大作戦」かんぽう社 1260 円（税込み）。しかし、姉妹一緒とは言え 5 歳と 6 歳の女の子をボーディングスクールに留学させるものでしょうか。

まずボーディングスクールについてご説明します。

boarding とは、本来は「寄宿、下宿生活」のことで、寄宿学校が原義。両親の家を離れての団体生活の中で心身ともに鍛えられ、学業のみならず、生活も指導 されるということで、甘えが無くなり、規則と自分に対する克己の態度が育まれるという。（ウィキペディアより）



「ハロー校」



←英王子達もここに入学します

イギリスでは「イートン校」などが有名で、上流階級の男子が ケンブリッジ、オックスフォードを目指して厳しい戒律の学校生活を送ります。で、この「著者のケース」ではスイスのそれもかなり低年齢向きの学校を選んでいきます。

スイスの学校「ラ・ガレン」は4歳から13歳までの子供を対象とした定員80名ほどの
こぢんまりとしたインターナショナル・ボーディングスクール。

ヨーロッパ各国やアフリカ、遠くはオーストラリアやアメリカなどから集まった生徒達の大半は寄宿舎に入
って一緒に暮らしている。

著者は30歳を過ぎてから二人の子供を出産している。ちょっと遅めになった分、
夫婦で真剣にどのように育てようかを討議したそうです。本を読む限りでは、本当に真面目なご夫婦です。



これからのグローバル化が進む世界で世界人として生きられるためにはいくつかの
能力が必要であると考えている。

- ①発想力・想像力
- ②暗記した知識ではなく、論理に基づく思考力
- ③問題発見力
- ④情報検索力
- ⑤問題解決力
- ⑥独自の結論を導き出す考察力
- ⑦他人を納得させるプレゼンテーション力
- ⑧世界語としての英語力 (+第二外語力)
- ⑨IT力
- ⑩人脈を得る力

う〜〜む、子供が幼稚園に上がるかどうかの頃にここまで考えていたのですね^^; すごい!

語学を取得するには「10歳」と言う壁があるそうです。しかも第二外国語までと言うと早く始めるに越
した事はない(第二外国語って日本語+英語+ α のことですよ)汗。
で、現在は「家の中では日本語」「姉妹同士では英語かフランス語。



←クレムリン宮殿のイメージ(笑)

両親に聞かれたくない話は「ロシア語」を使っているそうです。

最初はぐずっていた姉妹も一週間もすれば学校になれ、友達を作り、語学が飛躍的に
向上したそうです。子供の頭の柔軟性には恐ろしいものがあります。逆に年齢がある程度
いってしまうとなかなか**母国語感覚**になるのは難しいとのこと。

低年齢留学のメリット (著者のまとめです)

- ①学年が小さいと差ほど高い英語力を求められず、入りたい学校を選べる
- ②言語・文化・生活習慣などの垣根が低い年代なので異文化に早く慣れる
- ③つぶしがきく(笑)。万一何らかの事情で帰国する事になっても帰国子女扱いされる
(帰国子女ルートの別枠で途中編入を枠がある事が多い)

デメリット

①とにかく親が寂しい(T_T) ←子供が一番可愛いころでもんね

②帰国時の送り迎え、学費など教育費の総額がかなりの額になる

③何らかの形で日本語の補講が必要となる場合が多い

確かに親は寂しいでしょうね(T_T)。これに耐えなければ・・・・

最後に「FROM ダッド」としてパパからのメッセージが（大幅に要約しますが）

これからのグローバル社会を生抜いていくには三つの普遍的能力が必要だと考える。

それは「問題発見力」「情報収集力」「問題解決力」の三つで



ある。英語

やコンピュータ



は所詮道具であって目的ではない。

ご夫婦が選んだのは「語学」ではなく「ボーディングスクール」という日本にはない、環境を選んだということ。現在の日本の学校現場にはそれがない。納得です。最後の最後にお嬢さん二人からのメッセージが英語で^^;。すらすらと読めました。二人の文章はとても分かりやすく、しっかりしています。英語



が母国語感覚でしょうか。

←これ本当のガレン校です。Sound of Music に出て来そう♪

私なりにこの成功ケースの要因をもうひとつだけあげると。

「お嬢さん二人の年齢がとても近く（年子）、いつも二人でいる事ができた」

が、大きかったのではないかと思います。事実、二人の娘さんの読者へのメッセージの中にお互いにお互いを助け合うとても仲の良い様子が見て取れます。子供の順応性が非常に高いとは言え、やはり一人きりになると、結果がついてこないことも多いと思います。

とても平易な文章で非常に分かりやすい本です。お子様の留学を考えている方、**必読!**です。



ただ相当の覚悟と資金力

←スイスフランの札束です。今は当時より為替が1.5倍(T_T)

が必要であることも申し添えます^^。

次回は7月中順、テーマは例によって考え中です^^。

ブログも毎日更新しています! (週休二日で) (笑)。 <http://rresearch.blog103.fc2.com/>

株式会社アール・リサーチ 〒271-0051 千葉県松戸市馬橋 1896-1 ヴィレッジ K・I 馬橋 3F

Tel 047-342-3181 mobile 090-7428-8999 mail : ryubon@kkd.biglobe.ne.jp



で、終わろうかと思ったのだが^^ ;、何か物足りない。

確かに、「低年齢留学」の良さやベネフィットに関してはよく分かりました。明快。この点は著者に多いなる賛同をしたいと思います。その実行力と聡明な判断には頭が下がります。

著者は、「これからのグローバル化社会の中で必要な能力の向上は日本の学校教育では難しい」と考えたからこそ、「スイスのボーディングスクール」という最適解を選択した。

しかし、「スイスもしくは他の国に留学を出来る子供」は圧倒的に少数である。であるとすると、留学が出来ない多くの子供をどうすれば良いのか。こちらの方が実は問題が大きいです。

では、残された子供達をどうすれば良いのだろうか。著者が必要だと考える能力を再掲してみましょう。

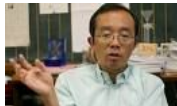
- ①発想力・想像力
- ②暗記した知識ではなく、論理に基づく思考力
- ③問題発見力
- ④情報検索力
- ⑤問題解決力
- ⑥独自の結論を導き出す考察力
- ⑦他人を納得させるプレゼンテーション力
- ⑧世界語としての英語力 (+第二外国語)
- ⑨IT力
- ⑩人脈を得る力

この中で⑧の世界語としての英語力 に関しては、早く始めるしかないのでしょう。多少の「ジャパングリッシュ」になろうとも通じればよいのです。英語はツール。第二外国語は絶望的だが(T_T)。

それ以外の能力については、確かに日本の教育制度の中では難しい。なぜなら肝心の教員がそのための能力開発を全くされていません。日本の教員のビジネスマンとしての能力は残念ながら低い。全部の教員がそうとは思いませんが、社会人経験のない人に上記の能力開発は難しいと思います。

費用と年数がかかる話になるが、上記の能力開発を行うカリキュラムを作り、民間の力を借りて新

本人が「さだまさし」に似ていると言いついてはそれほどでは？ (笑) →

しい授業を行うことにしか道はない、と考える。リクルートOBの藤原和博氏  が杉並区の和田中で校長として行った「世のな科」 <http://www.yononaka.net/> は非常に正しい方法だったのだと思います。日本の教育を、どげんかせんといかん！

ただでさえ、少ない子供達。グローバル社会を乗り切る能力を持つPTA (あなたの事です) (笑)。が学校に入っていくしか道はない。ゆとり教育なんて言っている場合ではないのです。